

発達検査と対人援助学

⑨ ヒドゥンカリキュラム

大谷多加志

2022年5月に開催された対人援助学マガジン読書会の中で「ヒドゥンカリキュラム」という言葉を耳にした。“隠されたカリキュラム”や“潜在的カリキュラム”と訳され、学習指導要領のように明文化されているものではないけれど、教育過程の中で、意識や価値観などが、よくも悪くも学習者に伝わっていくことを指します。

読書会でのやりとりの中でこの言葉が登場したのは、「大人や教員の失敗談に、学生は食いついて関心を示す」という話の流れからでした。考えてみると、専門職養成の現場は、既に専門職である者が(資格という、ある種のお墨付きを得ている者)、その専門職を目指す初学者に対して教える、という形になっています。教える側は、無自覚的にも「既にできる人」として学生の前に立つことになるため、“できなさ”や“失敗”を語ることは抑制されてしまいます。とは言え、語られないだけで、失敗は何事にもつきものですし、失敗から学ぶべきことは多くあります。

この読書会のあと、ある授業で自身の失敗談について、どういう状況で、どういう判断をして、どういう行動を取って、どういう結果になって、どう立て直そうとして、最終的に立て直せず終わった…という経過を自

分の心情とともにこと細かく説明してみたところ、いつもとは違い、何かに引きつけられるように話に聞き入ってくれました。もちろん「人の失敗に安堵する」というやや後ろ向きな動機づけも少しはあるかもしれませんが。とは言え、やはり失敗について語ることは意味がありそうです。

そこで、今回は発達検査を用いた相談場面での失敗や、検査者の不安・焦りなどのネガティブな感情を取り上げてみようと思います。

【パターン 1】不安



① 検査開始前

さすがに初心者の頃ほどではありませんが、相変わらず検査開始前は少しだけ緊張しています。「検査ができないことは必ずあ

るから。相手があることなので、絶対はないから」と学生に伝えていても、自分自身も「検査不能」という事態にはやっぱり怖さが残っていて。“どんな子が来るのかな”という未知への不安と、“導入で何かやらかしてしまわないかな”という自分自身への不安の両方が薄っすらと漂っています。

② 報告書作成やフィードバック

検査報告書については「主要ないくつかの要点に絞って伝えること」が推奨されていたりします。報告の内容が多岐にわたると、一見詳しく書かれていて良いような気がしますが、“結局何が言いたいのか”、“結局どういう子なのか”がぼやけてしまうからです。

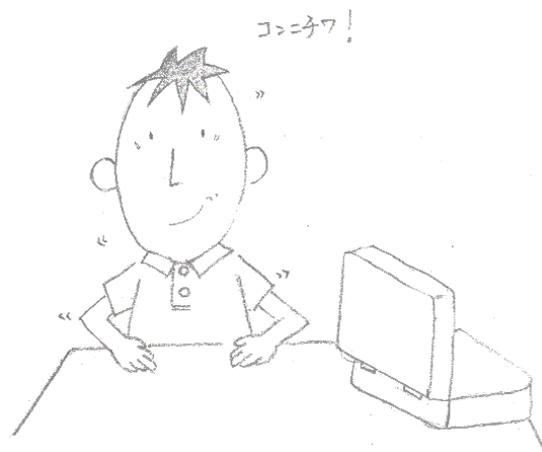
一方で、自身のことを振り返ると、どちらかという伝えたいポイントは2-3個しか見つけられない、という場合が多いです。別に意識的に抑えているわけではなく、シンプルにそんなにたくさん出てこないのです。つまり、「相手（保護者や関係者）がリアクションやコメントを返してくれなかったら、報告があつという間に終わってしまう」という状況であるわけで、1、2発の弾丸しか持たずに大激戦の戦場の赴くような、なんとも言えない心細さがあります。

冷静に考えれば、検査を実施したからといってその子のことが全てわかったわけではないのですから、検査者としての意見や感じたこと、仮説などを丁寧に伝えながら、それを聞いてどう思うか、検査場面以外での姿はどうか、など互いの話をすり合わせていけばよいのです。“何か言わないと…!”という不安から、あまりよく考えずに“それは本当に自分の意見か?”と思うようなことを口走ってしまい、そこからどンドン泥

沼にはまってしまったこともあります。

一度持ってしまった不安感は、検査を始めるまで消えないような気がします。消そうと思っても消えないので、「そうなんだね!今日は不安なんだね!」と少し自分を他人事目で見つめつつ、自分の感情の手綱を手放さないように心がける、という対応が精一杯であるように感じています。

【パターン2】緊張



① 事前情報

検査の前に、どの程度の事前情報があるかは、相談の現場によって異なります。個人的にはある方が良くも、無い方が良くも思っていないのですが、事前情報が先入観や緊張につながるケースもあります。

“前は検査不能でした”、“園では多動傾向、衝動性が高く、保育士の指示にはほとんど応じない”、“興味の偏りが強く、関心の無いものには目を向けない”など、検査者への警告かなと思うような記述が列挙されている事前情報を見ると、“無事に検査はとれるのか”という不安と、“でも、心理士さんは上手に対応されるから大丈夫ですよ?”と試されているような感覚を（勝手に）覚え

て、緊張感が高まります。

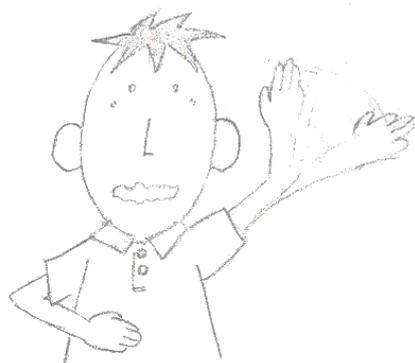
② 関係者の思惑

これも事前情報の一種かもしれませんが、検査に関する関係者のニーズが事前に伝わってくると、その内容によって妙な緊張が生じます。例えば、数値的に厳しい結果が出ると予測していて、その結果を持って保護者を説得してほしい…！という圧を感じるようなケースもあります。

これは私だけかもしれませんが、露骨な意図を感じてしまうと、なぜか「そう動いてなるものか！」という、普段は出てこない反骨心(?)みたいなものが動いてしまって、結局「思惑に沿いたくない！」という形で思惑に巻き込まれてしまいます。できるだけフラットな気持ちで検査に臨める方が、自分の場合は先入観が生じなくていいなあと思うのですが、一度生まれた思い込みや緊張は、残念ながら忘れようとすればするほど意識にのぼってきます。

基本的に「緊張」がプラスに作用することはあまり無いなあと感じています。でも「緊張」も不安と同じで、消そうと思っても消えないですよ…。

【パターン3】焦り



① 用具が見つからない

検査用具の収納の仕方は大体決めているので、普段自分が使っている検査用具を使う分には、用具を探すのに手間取ることはあまりないです。しかし、他の検査者が使った後や、初めて訪れた相談機関では、収納の仕方が自分と全然違っていて必要な検査用具を探し出せない、ということが生じます。

“使いそうな検査用具がどこに収納してあるか、事前に確認しておくのが普通でしょ”という至極もつともなご指摘がありそうですが、時に注意力不足や想像力不足で、“あ、この課題もやらなきゃだった…! ”、“まさかこの課題までやらないといけない状況になるとは…!”ということも起こります。

一度だけですが、10個あるはずの積木がどうしても1個だけ見当たらず、ある課題の時にどうしても積木が1つ足りないという事態が生じました。焦りに焦って、その時にひねり出した対応は、同じ色と大きさの「おもり」を使って検査者用の見本を作り、子どもには積木を使ってもらうという、今考えてもちょっと謎な対応でした。子どもは全然気にせず見本と同じものを作ってくれましたが、焦った時の判断は正直危険でいっぱいです。

ちなみに、見つからなかった積木は、直前に検査を行った別の子どもさんが、こっそり部屋の片隅に隠していたのでした。

② 次の課題に迷う

ある程度経験を積むと、“この検査課題を通過(または不通過)したなら、次はこれだな…”とほぼ自動的に頭に思い浮かびます。ただ、時々その自動思考が停止することがあります。子どもの気持ちが崩れて、“立て

直しを図るために次はどの課題が適切か…?”と戦略的に立ち止まって検討するという場合もありますが、特に理由もないのに思考が停まってしまうこともあります。

焦るのは後者の方です。運転をしている時にふと、“どちらがウインカーでどちらがワイパーだったかな?”と覚えてしまった時のように、当たり前前のことがふとした瞬間にわからなくなってしまうと、迷子になった子どものように焦りと不安が吹きだしてきます。特にきっかけがなく起こるのが困るところです。

対応としては、子どものタイプにもよりますが、あまり待ち時間が長くなると子どもの集中も切れてしまうので、早めに何かとりあえず思いついた項目をやってみて、その反応を見て次の課題を考える…というルートに乗せ直すことが多いように思います。

③ 子どもの気持ちが切れそうな気配…

検査時間が30分、40分を超えてくると、子どもの気持ちも少しずつ落ち着かなくなってきました。そんな時には検査用紙を確認して、最低限あとどの辺りの課題はやっておかないといけないか…を探り、その中で優先順位を考えていきます。

- ・必ずやっておく必要あり（必須）
- ・なるべくやっておきたい（推奨）
- ・できればやっておきたい（可能であれば）

の整理もしますが、加えて、「必須」の中でもさらに最優先のものから順序立てをします。例えば、「達成できそうかどうかの判断がつかず、かつ通過／不通過によってさらに実施しないといけない項目が出てくるも

の」は最優先にあたります。一方で「プロフィールライン確定のために実施する必要はあるが、これまでの検査中の様子からおおよそ通過／不通過の見込みがたつもの」は、これと比べたら少しだけ後回しにできそうな気がします。別にこれが正解とか、明確な基準があるわけではありませんが、少なくともここまでやっておけば報告書作成やフィードバックでも困りはしない、というところまで進めることを考えて、優先順位を決めていったりします。

書き終えてみても、今回の内容に何か意味があるのか、書き手としてはまったく手応えがないのですが、授業での失敗談が何かのきっかけになったように、これらのエピソードが誰かが何かを考えるきっかけになるのであれば幸いです。